■CROSS MEDIA SOFT R-5168~69

# 目　次

# 1. 始めに

この「メックブリゲード」は、「冷めたい戦争」と言われた東西緊張が依然として存在していた1985年に原型となるゲームが発売されました。

それからわずか6年、1991年は、湾岸紛争の軍事的終結、東欧諸国の急速な変貌、ソビエト社会主義共和国連邦における一連のクーデター、内紛、そして崩壊など、「事実は小説より奇なり」という言葉の通り、半年、3カ月先はおろか、明日、明後日の未来すら予測のつかない世界情勢が展開されています。

「メックブリゲード」は、ヨーロッパにおけるNATO軍とソビエト軍による仮想の地上戦をシミュレートしたゲームです。このような事態が起こるとは考えにくいですし、また想像したくもありません。しかし、それが実際に起きないと断言するには、余りにも大きく世界は揺れ動いています。

ゲームの中で破壊された部隊、それは単なるゲームの中の事象に過ぎないかもしれません。しかし、忘れないでください。ゲーム中に登場する数多くの戦車、歩兵戦闘車、戦闘ヘリコプターといった数多くの兵器。これは実際に存在し、使用されているものだということを。

# 2. シナリオ解説

## 概　略

ペレストロイカに後押しされたさまざまな解放政策は、ヨーロッパにおける軍事地図を塗り変えてしまった。ベルリンの壁は取り払われ、ドイツは統一され、東側諸国の数多くでは共産政権が崩壊し、共産主義の象徴であるレーニン像は倒された。

ワルシャワ条約機構は解体され、ヨーロッパ全体での大規模な軍縮を提唱したゴルバチョフは、自国の軍隊の大幅削除を約束した。総兵力500万、地上戦力だけで約200万人の兵力を、21世紀までに半分まで削減するというのである。実際、ソ連の経済は徹底的に混乱しており、500万もの軍人を養う力は残されていなかったのだ。

もちろん、軍部は猛烈に反対した。大規模な兵力の削減は、そのまま自分たちの働き口と名誉の喪失につながるからである。しかし、幾度の制度の改正によって強大な権力を持つようになった大統領に反発することは不可能に均しかった。だが反発をしていのは軍人だけではなかった。俗に言う保守派、そして完全な共産主義者、左派といわれる人たちである。彼らはゴルバチョフの政策を、西側の情報活動に負けた結果であり、資本主義経済への移行は国土を売り渡すものだとして猛反発したのである。

いつしか同じ意志を持つものたちは密に連絡を取り合うようになり、ゴルバチョフが敵視していたKGBも彼らの側についた。

折しも、国際紛争を引き起こし徹底的に打ち負かされた中東のα国で、大規模な内戦が発生した。元々民族間の争いが激しい国家であったが、それまで彼らを抑えていた政府軍が先の国際紛争によって崩壊してしまったためである。

南北から首都に迫る反乱軍を抑えきれなくなった政府軍は、ついに国際法で禁止されている毒ガス、さらに極秘に開発されていた核兵器を使用して一気に状況の打開を図ろうとした。しかし、軍内部に存在した反乱軍によって、核弾頭を搭載した中距離弾道弾が一発、反乱軍の手に渡ってしまった。

それから7日の後、α国首都の上空に立ち上がった巨大な爆炎は、50年近くの昔、広島・長崎に立ち登ったものと同じであった。

時を同じくして隣接するβ国の陸軍が国境を越えた。

ソ連は核により壊滅的打撃を受けたα国から、正式に救援依頼を受けるが、国際紛争に発展するのを恐れたゴルバチョフは、軍の派遣を拒否する。

しかし、α国と国境を接する北カフカス・ザカフカス・トルケスタン軍管区司令部は、α国との軍事同盟は依然、有効であると宣言。2個戦車師団と4個自動車化狙撃師団、これに加えて1個航空団と2個空挺師団を中央政府の指示を無視して、独断で派遣した。

大規模な部隊が南下を開始し、α国首都には空挺部隊が降下した。

国連の安全保障理事会がただちに召集されたが、安全保障理事会の常任理事国であるソ連を欠いた理事会は、一層混迷を深める結果となった。

そういった混乱を後目に、キエフ・オデッサ・中央アジア・シベリア軍管区の司令部が相次いでα国支援を表明した。

1993年、肌寒い春の朝靄を突き、現れた数十両の戦車は、クレムリンを包囲、制圧、ソビエト救国委員会の設立を宣言した。

前政府の主要な閣僚は軟禁され、唯一状況を説明するため渡米していたゴルバチョフだけが唯一難を逃れるに至って、世界の混乱は頂点に達した。

国連総会はソ連軍のα国侵攻を激しく非難すると共に、即時の撤退を通達、加えてソビエト社会主義共和国連邦の現状維持、およびゴルバチョフを代表とする前政府の復権を勧告した。

これに対してソビエト救国委員会は、目に見えるもっとも具体的な形での返答を行った。戦後48年ぶりの硝煙と爆発が彼らの返答だった。

防空網をかいくぐった戦闘爆撃機と、続く阿鼻叫喚の中、ドイツの市民が、ブラウン管を通して世界が見たものは、地平に昇る朝日をバックにして迫る、何百、何千のヘリコプターの群れであった。

国連の勧告からわずかに6時間後のことであった。

## チューリンゲン森での戦闘（ライプチヒ南西1993年5月8日）

北ドイツ平原を猛進する主力部隊とは別に、ライプチヒからチューリンゲン森を抜け、かつて激戦が起こるであろうと予測されたフルダを通過しフランクフルトに到達することを命令されたソビエト軍部隊は、ライプチヒの南西の都市、ゲーラ付近にてアメリカ軍機甲偵察連隊に属する小部隊と遭遇した。

戦力に徹底的な差のあることを認識していたアメリカ軍指揮官は「勝利か、しからずんば死だ」と将兵に命令した。

アメリカ軍の決死の攻防で戦闘は長期間に渡り、ソビエト軍は多大な損害を出しながらも、突破成功を得た。だが、少なからずの損害を受けた今、単独でのフランクフルト突入には不安を感じた司令官は、北ドイツ平原から侵攻している部隊の一部をフランクフルトに送るよう要請した。

## 防衛戦を維持せよ（カッセル1993年5月11日）

カッセル付近にて、幾重もの防衛線を展開している米第3機械化師団第1機械化大隊は、ライプチヒからの部隊と合流するために移動中のソビエト軍部隊を阻止しようとしていた。しかし、戦況は厳しく米本土からの増援到着までの時間を稼ぐことにも窮していた。

時間さえあれば、フランクフルトはおろかドイツ全体も救われることになる。米軍部隊は甚大なる損害を被ったものの、任務そのものの遂行には成功した。彼らは時間を稼ぐことができ、その結果、ソビエト軍は一時的に撤退したのである。

## 形勢逆転（カールシュリュッヘ1993年5月25日）

徹底的な空爆と、さらなる増援を受けたソビエト軍は、ついにフランクフルトを「解放」した。しかし、カッセルでの戦闘で失った時間は、NATO軍に反撃のチャンスを与えることとなった。

ライン川を臨む街、カールシュリュッヘ近郊に到着したソビエト軍を待ち受けていたものは、米本土からの増援で形成された、シュタットガルトからハイデルブルグへと続く長大な戦線を形成するNATO軍の大反撃であった。

反撃の一翼を担い、祖国救出の意欲に燃えるドイツ軍機械化大隊は、アメリカ軍の攻撃ヘリ「アパッチ」の支援を受け、突出したソビエト軍自動車化狙撃師団に対して突撃を開始する。

NATO軍反撃の先陣を切ったドイツ軍部隊は、少なからぬ損害を被ったものの、ソビエト軍の撃滅に成功、ソビエト軍は残存部隊をまとめて東へと撤退していった。

## 牙の中へ（オルデンブルグ1993年5月26日）

ブレーメンへの増強のため、イギリス本土から派遣された英第24混成大隊は、急遽命令変更の指示を受けた。NATO軍防衛線を突破してブレーメンのNATO軍を分断するためにオルデンブルグを目指す、ソビエト軍自動車化狙撃師団を阻止しろというのである。

戦力の絶対的な差は覆すことはできず、第24混成大隊は壊滅的な打撃を被った。しかし、ソビエト軍の波状攻撃を撃退することには成功した。現在、部隊を再編成中であり、さらなる戦闘報告は後ほど…。

# 3. 戦術について

## 展開について

防御作戦での典型的な部隊展開を示します。前線に塹壕を構築し、中隊規模の歩兵部隊を各所に配置します。この防衛線の数スクウェア後方に対戦車ミサイル部隊と、装甲車両を数部隊を配置してください。

総指令部、砲兵部隊は後方マップの端に配置、可能ならば地対空ミサイル部隊、高射砲部隊による対空防御を固めることをお奨めします。また、弾着観測部隊を前線から5〜10スクウェア後方の丘陵や、敵の侵攻経路を見渡せる場所に配置します。この陣地に対して敵部隊が攻撃してきた場合、まず歩兵部隊が攻撃をくわえ、ほぼ同時に対戦車ミサイルと対戦車砲の猛烈な砲火を浴びせることができます。さらに戦車部隊を温存しておき、敵の攻撃主力が明らかになったときに、敵主力に対して投入することもお奨めします。

## 命令系統について

総指令部は、後方に配置して敵の攻撃を避けるのが鉄則です。ただし、可能な限り丘陵に配置し、前線の弾着観測部隊が壊滅した際には、直ちに砲兵隊の指揮を取れるようにします。前線指令部は所属部隊から1〜2スクウェア後方が理想です。

一般的に、大隊指令部やソビエト軍、イギリス軍の戦車連隊指令部は、絶対的な必要に迫られない限り戦闘には参加しません。

## 移動しながらの攻撃について

このゲームでは、部隊が移動中でも攻撃を行うことができます。ただし、命中率はかなり低いものとなります。部隊の移動途中に格好の「遮断地形」スクウェアがあり、そこからの正確な攻撃を行いたい場合、そのスクウェアで部隊の速度を「0」に設定した後、攻撃を行うと良いでしょう。

この場合、部隊に与えられていた移動命令は維持されます。また、移動命令を維持する必要がない場合でも、「停止」コマンドによる命令の破棄より、速度を「0」に設定する方法をお勧めします。停止コマンドを使用すると、そのパルスの前の継続する命令が無効になります。

## 兵員輸送車、歩兵、煙幕の関連

移動中の歩兵部隊が敵の着弾観測部隊に発見されることは、絶対に避けなければなりません。移動中の歩兵部隊に間接砲撃が加えられると、ほぼ確実に粉砕されます。歩兵の移動にはできる限り兵員輸送車を使用し、敵部隊がライフルの射程距離に入ってから降車させるようにしてください。

また、歩兵部隊による攻撃の際には、かならず煙幕を使用してください。敵部隊から部隊を隠すことが作戦の大前提です。

## 煙幕について

煙幕は防御部隊を分断する目的で使用できます。敵部隊を分断した後に個別に撃破していけば良いのです。一方、防御側からみれば、突撃してくる部隊と後方から支援する部隊を分断する目的で使用できます。

煙幕の弱点は、すぐに消散してしまうために、大量の煙幕弾が必要だということです。ただし、肉眼で見通せる程度の煙幕でも、命中率を極端に低下させるという事実は重要です。

## ヘリコプターについて

ヘリコプターの作戦機能は３種類あります。まず第一に、偵察機能。特に敵部隊の陣容を把握するのに絶大な威力を発揮します。第二に、敵後方上空を飛行して、砲兵部隊や指令部を撃破することができます。

第三に、ヘリコプターは対戦車兵器として極めて有効です。地対空ミサイルと高射砲部隊を撃破してしまえば、戦車はヘリコプターに対して裸も同然となります。もし、敵軍にヘリコプターがあると予想されるならば、防空兵器を余分に「購入」しておくことをお奨めします。

## 歩兵用特殊兵器について

「遮断地形」に身を隠している歩兵部隊は、敵部隊が同じスクウェアに侵攻してくるか、自ら攻撃を開始しない限り発見されません。したがって、防御側の歩兵部隊の場合、射程を「0」に設定しておくのが賢明といえます。

逆に攻撃側は、常に歩兵部隊を戦車部隊の１スクウェア先に配置して前進させることが考えられます。戦車部隊が待ち伏せ（アンブッシュ）を受けるよりは、歩兵部隊の方が全体的な見地からいって損害が少ないからです。

時間的余裕のない場合には、歩兵を戦車に乗車させるか、兵員輸送車に乗車させてください。アンブッシュを受けた場合、その場で歩兵を降車させて反撃を行うことができます。

## 行動力について

このゲームでは、部隊が受けた行動力の低下が100を越えると、同じスクウェアに侵攻してきた敵部隊に簡単に撃破されます。したがって、戦術的には常に敵戦線の手薄な地点を捜し求め、そこに圧力をかけ続けておき、最後に数個小隊を投入して接近戦で撃破する…という戦法が有効です。

また、歩兵部隊と砲兵部隊の砲撃により、敵部隊の行動力を減らしていくことも有効です。この場合、敵部隊は新たな攻撃目標を選定できなくなります。

## 各種兵器の混成使用について

このゲームは、多くの兵器を戦術的に使い分けることにより、勝てる確立が高くなります。攻撃する場合、砲兵隊の任務は前進する部隊を援護するため煙幕弾を発射、次に砲撃により敵歩兵部隊と対戦車ミサイル部隊に圧力を加え、さらに、敵装甲部隊に圧力を加えるための支援砲撃を行うということになります。

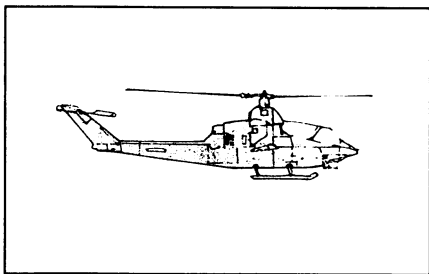
歩兵部隊の場合は、敵に圧力を加え、敵歩兵部隊を強襲、さらには敵装甲部隊に対する圧力となります。戦車部隊は、敵装甲車両を撃破、歩兵部隊や対戦車ミサイル部隊を粉砕するのに使用します。偵察車両や軽戦車は、攻撃主力部隊の数スクウェア前方にあって、敵部隊の発見に努め、敵の攻撃を誘うことによって自軍の攻撃目標を明確にします。

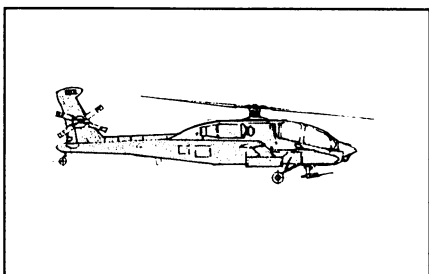
防御する側からみれば、歩兵部隊を敵戦車の待ち伏せに使用したり、接近してきた敵部隊に圧力をかける一方、砲兵部隊の砲撃により敵歩兵部隊を「釘付け」にし、対戦車ミサイル部隊によって味方歩兵部隊と混戦状態にある敵装甲車両を撃破します。

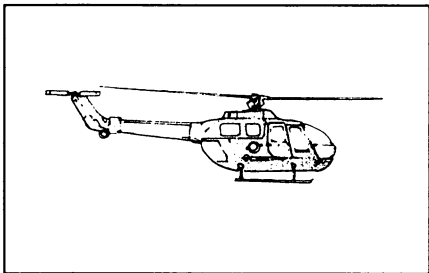
戦車部隊は予備機動部隊として使用し、敵主力部隊に対して投入したり、装甲車両の支援を持たない敵歩兵部隊に対しての反撃兵力として使用します。

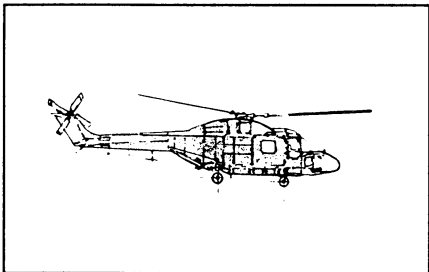
# 4. 使用兵器総覧

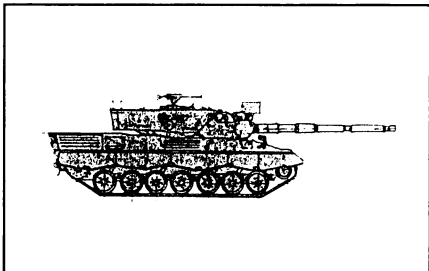
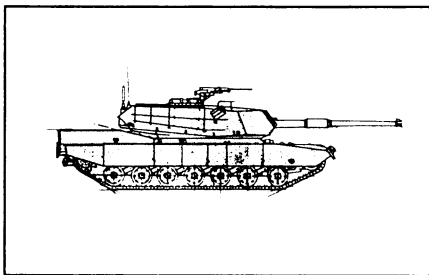
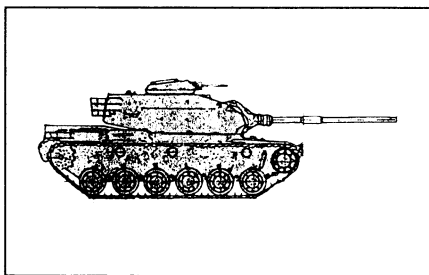
## ■ AH-1 “コブラ”

ベトナム戦争はもちろんのこと、イラン・イラク戦争、そして湾岸紛争でも数多く使用され、もっとも多くの実戦を経験した戦闘ヘリコプター。汎用ヘリUH－1を基に、56年から開発が始められた。機体全幅を狭め、兵装の搭載場所として補助翼を追加した他は、ほぼ原型機と同じである。固定装備として20mm三連バルカン砲を機首下面に装備し、TOW対戦車ミサイル8発などを搭載可能。照準装備の性質上、発射したミサイルが到達するまで機体を露出しなければならないのが難点である。

## ■ AH-64 “アパッチ”

世界でもっとも強力であろう戦闘ヘリコプター。機動性、生存性が高く、航続距離が長く、攻撃力も強大と何でもありの機体であるが、ついでに言うなら価格も高い。機体は23mm機関砲に対してもある程度耐えられるほど頑丈であり、エンジンの排気口には赤外線減衰装置が装備され、赤外線追尾ミサイルなども容易に回避できる。レーザー測距装置など多くの電子装置を装備し、夜間でも効果的な攻撃を行える。通常のヘリの2倍に当たる16発もの対戦車ミサイルを搭載でき、固定装備として30mmチェーンガンを装備する。

## ■ PAH-1

対戦車ヘリコプターとしては小型で、その小ささゆえに兵装搭載量をはじめとする性能はあまり高くない。しかし機動性に富み、またそれゆえに目標として狙われにくい。基本設計は20年以上も前のものであるが、よくまとめられた機体であり、これまでに1,000機以上が生産されている。通常、HOT対戦車ミサイルを6発搭載し、他にロケット弾や機関砲なども使用できる。ただし防御装置は貧弱であり、生存性にはかなりの不満が残る。

## ■ リンクス-3

元来、多目的戦術ヘリコプターとして設計されたものである。飛行性能においては卓越したものを持ち、ハインドなど東側のヘリコプターが真似しようものならローターが抜けるような高機動を行うことが可能である。パイロットなど2名が前面に搭乗し、兵員室に完全武装兵10名を搭乗させて運ぶことが可能、これに換わり対戦車ミサイル発射機と射手3名を搭載することも可能である。対戦車ミサイルの代わり地雷やロケットなども搭載できる。82年に勃発したフォークランド紛争でも活躍した。

## ■ Mi-24 “ハインドE”

敵の戦線後方にある重要な拠点に、分隊単位(8名)の歩兵を降下させるべく設計された戦闘支援ヘリコプター。アパッチのように単独で行動することはなく、ある程度の兵力を運べるように、相当数がまとまって行動する。兵員を安全に降下させるのに必要なだけの対地兵装を搭載するため、機体は大型化し、機動性よりも速度を重視した設計になった。搭載兵器の最大射程からの攻撃を得意とするらしく、防御戦よりも侵攻戦に多用される。機体装甲も厚く、対戦車装備も数多く搭載されている。

## ■ Mi-28 “ハボック”

ハインドに代わり、ソ連の主力戦闘ヘリコプターとなりつつある機体。存在が確認されたのが87年以降であるため、最近に至るまで詳細は不明である。機体はアパッチよりも大きくハインドよりも小さい程度で、重量はかなりのものがあるようだ。エンジン部分はハインドと同じだが、ローター部分には改良が見られる。主翼下にはAT－6スパイラル対戦車ミサイルを8発程度搭載でき、さらに空対空ミサイルなども搭載可能と言われる。固定装備は新設計の30mm機関砲。電子機器も一定水準のものが搭載されている。

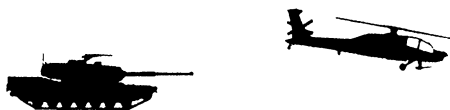
## ■ M60A3

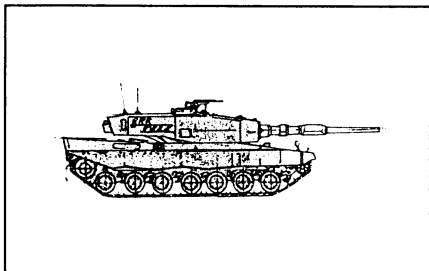
ソ連のT－54／55に対抗すべく開発された戦車。開発からすでに30年近い年月が経過するが、さまざまな近代化改修が施され、今だに現役戦車として多くが第一線に配備されている。A3型は、足周りやエンジン部の改良を行い、信頼性・機動力を向上させたタイプ。新型のレーザー測距装置を装備し、射撃性能も大幅にアップしている。発煙装置や自動ハロン消化装置を取り付けたタイプも存在する。海兵隊が使用しているタイプにはリアクティブアーマーが装着されており、またイスラエルなどでは独自の改良が施されている。

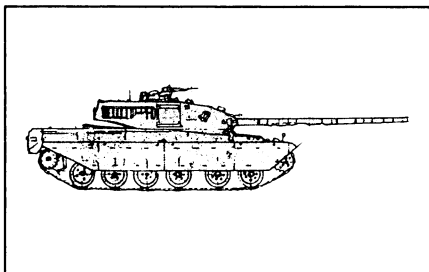
## ■ M1A1 “エイブラムズ”

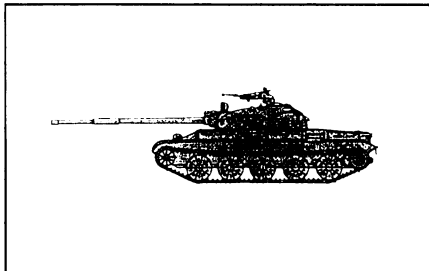
70年代、西ドイツとの共同新型戦車開発(MBT－70計画)に失敗したアメリカ陸軍が、XM1戦車計画として独自に開発した戦車。それまでのアメリカ戦車と異なり、きわめて偏平でスマートな外観を持つ。特に正面では傾斜角まで持つチョバム装甲で砲塔全体が包み込まれ、搭載する120mm滑空砲は命中率、破壊力に優れる。まさに史上最強の戦車の一台と言えるだろう。最近では射撃システムやセンサーなど、攻撃面を中心にさらなる改良が図られた「A2」が企画されている。ちなみに価格は1両約7億円。

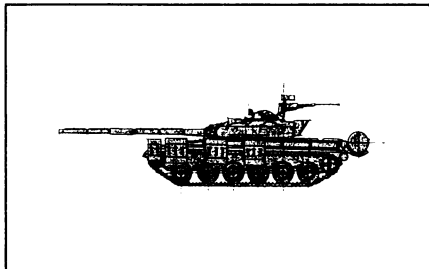
## ■ レオパルド 1

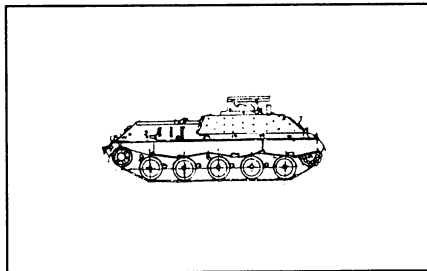
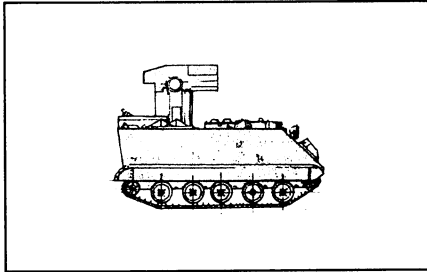
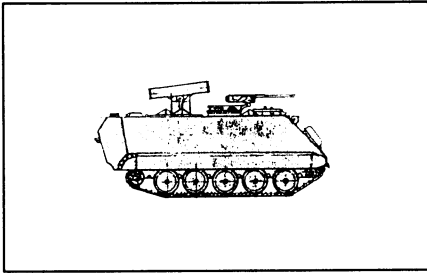
50年代末に企画されたNATO軍共通戦車構想の結果、西ドイツで開発された戦車。ドイツ以外のヨーロッパ西側中小諸国にて多数使用され、実質的なNATO軍共通戦車に近いものとなっている。総生産数は約4500両。「撃たれる前に撃て」という設計思想を持つため、装甲が比較的薄い反面、機動性に優れ、また優秀な105mm砲を搭載している。シュノーケルを取り付ければ、4mまでの潜水が可能であり、対NBC装備や自動消化装置なども完備している。

## ■ レオパルド 2

70年台に行われたアメリカとの主力戦車共同開発計画（MBT－70）が放棄された後、その代替案として設計された戦車。現在までに2000両以上が実戦配備されている。車体は複合装甲と装甲鋼板による全溶接構造で構成され、対NBC装備も完備する。レオパルド1同様にオプション装着によって4mまでの河川を潜水することができる。主砲の120mm滑空砲には、HEAT弾（対戦車榴弾）の他、貫通力の高い新型のAPFSDS－T弾（翼安定式装弾筒付曳光鉄鋼弾）が使用できる。

## ■ CHIEFTAIN “チーフテン”

センチュリオン、コンカラー両戦車の後継として開発されたイギリス陸軍の主力戦車。70年までに900両がイギリス陸軍に引き渡されたほか、クウェート、ヨルダン、オマーンなどにも輸出されている。火力と防護力については申し分ないものの、機動性に問題が指摘されたこともあったが、現在では改良に改良を重ね、一線級の戦車として活躍中である。主砲は120mmライフル砲、最高1分あたり8発まで発射できる。最近の車両には「スティルブリュウ」と呼ばれる追加装甲が施されている。

## ■ T-62

画期的な対戦車砲である滑空砲の開発に成功したソ連が、T－55にその滑空砲を搭載するため開発した戦車。無論世界初の滑空砲搭載型戦車である。開発過程からもわかるように、ベースはT－55である。アフガン紛争以降、増加装甲やリアクティブアーマーをつけたタイプも登場した。主砲の威力は1500m以内でしか発揮できず、砲塔バスケットもない。あくまでもT－55からT－72などへの過途的な戦車である。

## ■ T-72

ソ連の新鋭戦車T－64の廉価・大量生産版。T－54／55の後継となる主力戦車である。全体的な性能としてはT－64やT－80の方が上であるが、数ではT－72の方がはるかに多い。砲塔・車体前部にラミネート装甲が施され、さらに増加装甲材やリアクティブアーマーの装着などを行って防御力の向上を図っている。主砲の125mm滑空砲には悪名高い自動装填装置が使用されている。現在基本生産型の他に改良型のMシリーズと、チェコとポーランドでのライセンス生産型のGシリーズが存在する。

## ■ CHALLENGER “チャレンジャー”

イギリス軍の80年代の主力戦車計画（MBT－80）が失敗に終わり、またチーフテンの改良型「FV4030」がイラン政変によって輸出できなくなったことをきっかけにつくられた主力戦車。FV4030をベースに、イギリス軍仕様の改造が施され、83年には早くも実戦配備されている。現代戦車の複合装甲化に拍車をかけたチョバムアーマーと、120mmライフル砲により、火力や防御力については申し分無いが、射撃統制装置と機動力には問題が残る。改良型である「チャレンジャー2」が計画中である。

## ■ T-80

ソ連の最新鋭主力戦車であり、T－64の後継とされている。基本設計はほぼT－64と同様のものであり、自動装填装置の採用によって、乗員は3名に抑えられている。ソ連戦車ではじめて確認されたリアクティブアーマーを大量に装備していることもあり、T－72のように砲塔部分に特別の増加装甲を施している姿は見受けられない。主砲は125mm滑空砲で、AT－8対戦車ミサイルも発射できるといわれる。射撃統制装置などは、T－64とほぼ同様である。現在、さらなる改良が施された「SMTM1989」というタイプが確認されてる。

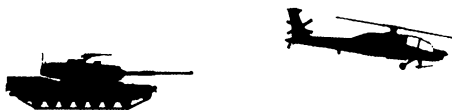
## ■ M150

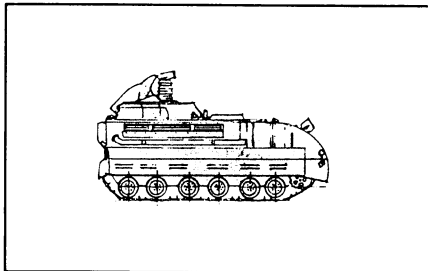
別名XM233E1。頭文字に「X」がついているところから見ても分かるように、試作量産型の感が強い車両。M113兵員輸送車に、TOW対戦車ミサイルの発射器を搭載しただけの簡易な対戦車車両であり、ミサイルを発射するためには、乗員室の床に砲架を固定し、上部のハッチを開けなければならない。現在1400両程度がアメリカ陸軍に配備中であるが、逐次同程度の攻撃能力を持ち、運用性に優れた「M901」と代替されつつある。

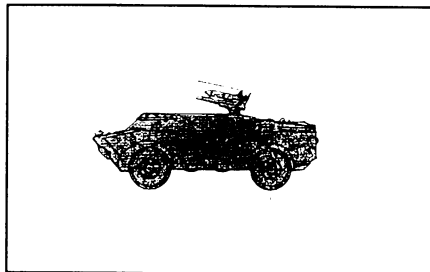
## ■ M901

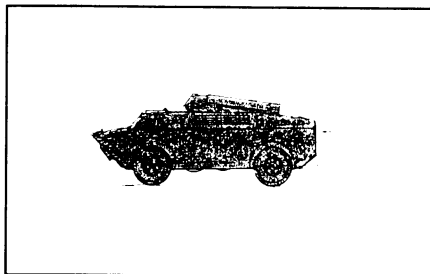
79年より実戦配備が開始された対戦車車両。M113兵員輸送車の車体に、TOW対戦車ミサイルの発射装置を搭載している。発射器自体が2本のアームで昇降し、さらに同軸に照準器や映像転送機などを装備、単に発射器を取り付けただけのM150とは運用のしやすさなどにおいて雲泥の差がある。ミサイル搭載数は発射機に2発、車内に10発の計12発。近接戦闘用に機銃も搭載している。機動力をアップしたM113A3を車体として利用した、M901A2の生産が予定されている。

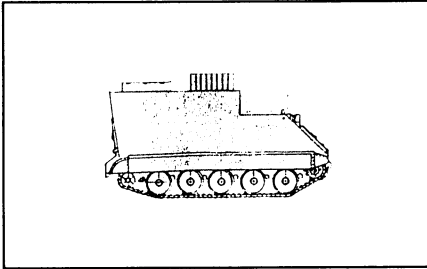
## ■ JAGUAR1 “ヤグアル1”

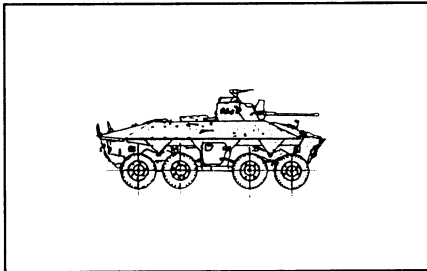
50年代に西ドイツ陸軍によって開発された、JPz4－5対戦車自走砲とRakJPz2自走対戦車ミサイルの車体をベースとした自走対戦車ミサイル。ヤグアル1はかつてのRakJPz2を改造したもので、搭載ミサイルがHOT対戦車ミサイルを換装されている。HOT対戦車ミサイルの操作が車内から行えるのが特徴。自動装填装置を持ちミサイル発射後、自動的に予備ミサイルが昇降式の発射機に装填される。搭載ミサイル数は20発。

## ■ FV438

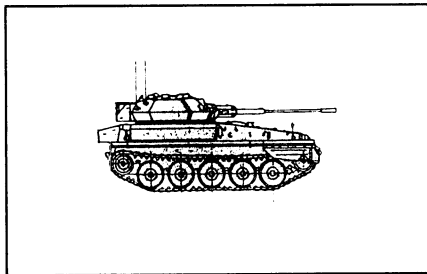
戦後、63年から実戦配備が進められた英陸軍の兵員輸送車「FV432」シリーズに、スウィングファイア対戦車ミサイルを搭載したもの。ミサイルは装甲ボックスに収納され、他にペリスコープ式照準器やキューポラと共に一体化され兵員室ハッチの上部に搭載されている。次弾の装填は車内から行うことが可能。元になったFV432同様に浮行用スクリーンを展張しないと、水上航行はできない。ミサイル搭載数は14発。

## ■ BRDM-2

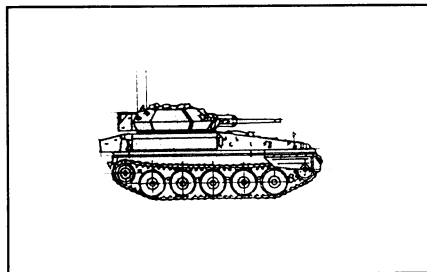
BRDM－1の装甲や武装を強化する目的で62年から生産された装甲車両。砲塔を取り付けるためにエンジンの位置が後方にずらされ、エンジンの出力なども強化、70年代末まで生産が続けられた。各種の派生型も含め、20000台弱が生産され、チェコやハンガリーでも使用されている。砲塔は、BTR－60用に開発された物の流用。ゲームで登場するものは、AT－3サガー対戦車ミサイルを搭載した対戦車タイプである。

## ■ BRDM-3

BRDM－2の派生型の一種で、搭載している対戦車ミサイルが、AT－5スパンドレルというだけであり、他の点についてはほぼBRDM－2と同じである。よって詳細についてはBRDM－2の項を参考にしていただきたい。万が一にソ連のヨーロッパにおける攻勢があるとした場合、先陣を切るのはこのBRDMシリーズであろう。

## ■ FV102“ストライカー”

スパルタン装軌車両シリーズの一種。車体にストライカー対戦車ミサイルを装備したもの。外観はスパルタンに瓜二つであり、敵の目を錯乱させる意味あいも持つ。発射装置と車体内、合計10発のミサイルを装備する。目標に命中するまでのミサイルの誘導方式により、車両外からの操作も可能である。装甲は薄いが、その分機動性は高く、有効な兵器とされている。

## ■ M577

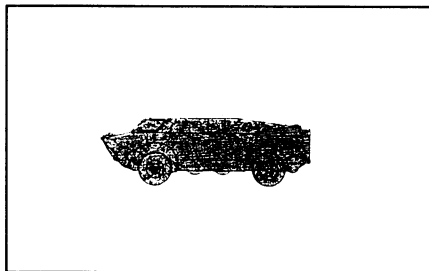
M113兵員輸送車をベースとした派生車両。移動式の簡易野戦指揮所として使用するために、兵員室の天井が上げられて、人が立って車内を動けるようになっている。野戦指揮所として必要な無線機などが完備されており、車体後方にテントを張って、さらにスペースを広げることも可能である。運転席の横にある発電機は、通信設備に電力を供給している。今までに6000両前後が生産された。

## ■ LUCHS “ルックス”

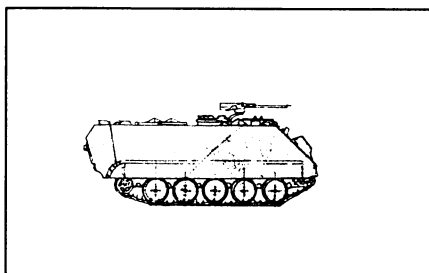
70年代に実戦配備されたドイツ陸軍の装輪車両。水陸両用偵察車両、同輸送車、カーゴトラックまでを含めた一連の装輪車両の派生型である。車体全体が防弾鋼板の溶接構造でできており、20mm機関砲程度の攻撃に耐えうるだけの防御力を持つ。砲塔は前部にスペースドアーマーを使用し、また主砲の20mm機関砲は命中精度は低いものの、対空射撃も可能となっている。水陸両用能力も持ち、時速9kmでの浮航も可能である。熱線暗視照準装置のついたものはルックス2と呼ばれている。

## ■ SCIMITAR “シミター”

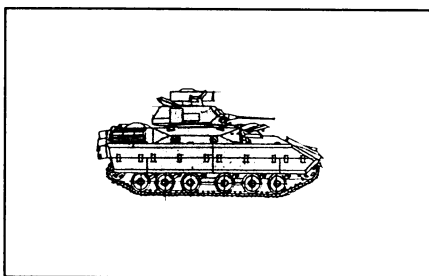
60～70年代に開発・生産された英国陸軍の、偵察や火力支援、さらには対戦車戦闘を目的とした偵察装甲車両シリーズ「スコーピオン」の派生型。近接偵察用の車両である。車体や砲塔、各種の装備についてはほぼスコーピオンと同様で、主砲であるL21A1・ラーデン30mm機関砲は2000mの有効射程を持ち、十分な支援火力となりうる。また1mの渡航能力も持つ。イギリス陸軍の他に、ベルギー陸軍などでも使用されている。

## ■ SCORPION “スコーピオン”

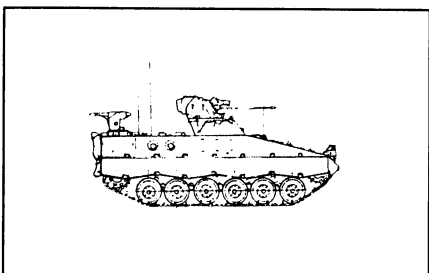
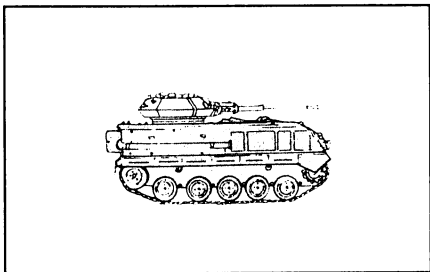
シミターの所でも述べた通り、60～70年代に開発・生産された英国陸軍の偵察装甲車両ファミリーの元をなす車体。各国に輸出され、「シミター」をはじめとする数多くの派生型を生み出している。車体、砲塔ともアルミ装甲を用いた溶接構造で、小火器程度の攻撃には耐えられるだけの防御力を持つ。軽量さや車体の小型さゆえに、C－130輸送機で2両の空輸が可能である。主砲はL23・76mm砲、40発の弾丸を搭載する。

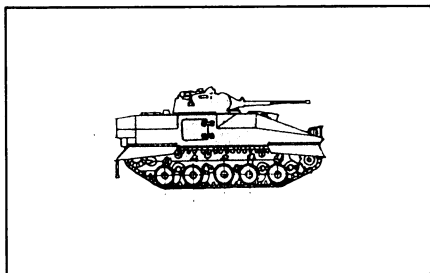
## ■ BRDM

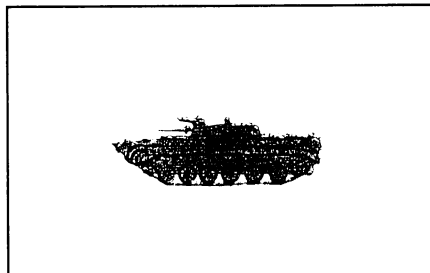
ソ連軍の「浮航能力など機動性に重点をおいた偵察車両を」との要望に応えて50年代に開発、生産された車両。この車両が採用される前のBTR－40の欠点の多くを改善している。軽装甲車のベース車両としても使用され、対戦車ミサイル搭載型をはじめとして、数多くの派生型が存在する。機密構造では無いために、対化学戦では乗員自らが防護服を着なければならない。ちなみにBRDMとは「装甲偵察哨戒車」のロシア語の略である。

## ■ M113

空輸や空中投下、さらには水陸両用での使用が可能、というアメリカ陸軍の要望に応じてFMC社で設計された兵員輸送車両。現在、アメリカ陸軍はもちろんのこと、数多くの西側諸国で運用されており、また対空車両型や対戦車ミサイル搭載型、迫撃砲搭載型など様々な派生型が存在する。防弾アルミで構成された車体は、完全な水密構造にもなっている。主装備は車体上面にある12.7mm機銃。11人の兵員を輸送することが可能である。通常兵員は、車体後方の乗降用ランプから出入りする。

## ■ M2

アメリカ陸軍の最新主力戦車「M1 エイブラムス」に随伴する能力のある兵員輸送車両という構想に従って設計された歩兵戦闘車。現在、アメリカ陸軍機甲部隊の中核を成しつつあり、現在5000両ほどが配備されている。TOW対戦車ミサイルと、対戦車ヘリ用のチェーンガンを改造した25mm砲を搭載し、7名の兵員を輸送することが可能となっている。コストが高いのが一番の弱点であるが、生存性の高さで相殺することができよう。なお、騎兵戦闘車バージョンはM3と呼ばれる。

## ■ MARDER “マルダー”

70年から量産型の実戦配備が開始されたドイツの歩兵戦闘車。歩兵戦闘車の他に対戦車車両、偵察車両など各種支援車両のベースともなっている。車体、砲塔とも防弾鋼の全溶接型であり、20mm機関砲クラスの攻撃に耐えうるだけの防御力を持っている。乗員は4人。主装備は20mm機関砲で携帯弾数は1250発。追加装備としてミラン対戦車ミサイルを持つ。多くの改修型が存在し、現行のA3型にいたっては、もとの車両が分からなくなるほどの追加装甲が施されている。

## ■ FV432

60年代に実戦配備された英国陸軍の代表的な装甲兵員輸送車。主要装備は機関銃一挺のみであるが、3連スモークチャージャーが2基搭載されている。10名の兵員を輸送することが可能。M113より装甲が厚く、また全鋼製であるために重量が4トンもあり、浮航用のオプションを付けないと水上走行はできない。M113同様に各種の派生型が存在する。価格が高いために国外への輸出はあまりなかった。新型のMCV80が配備された後も第一線で活躍している。

## ■ MCV80“ウォーリアー”

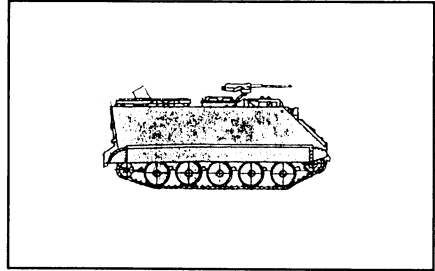
FV432シリーズの後継にあたる英国陸軍の装甲兵員輸送車、87年から実戦配備されている。車体は防弾甲板の全溶接構造で、防御力はFV432よりはるかに高い。主武装にはL21A1・ラーデン30mm機関砲を装備し、火力支援能力を持たせている。4連装スモークディスチャージャーも装備し、7人の兵員を輸送することが可能である。なお、浮航能力は持たない。他に修理・回収車タイプや砲兵観測車両タイプが存在する。

## ■ BMP-1

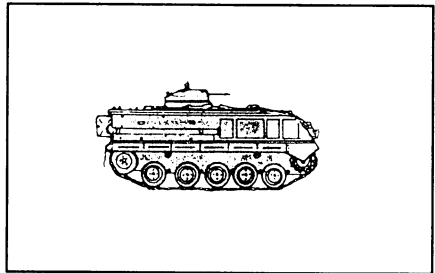
第二次世界大戦以降、歩兵の機械化に遅れていたソ連の初の本格的歩兵戦闘車。大量生産がはじまったのは70年からである。乗員を含めて11名を輸送することが可能となっている。単なる兵員輸送車であるBTRシリーズと異なり、73mm低圧砲（射程700m程度）と対戦車ミサイルを装備するなど、かなりの火力を持つ。しかし全体的に軽装甲で、特に側面はほぼ垂直なため、使用方法を誤ると敵の火砲を浴びて集団棺桶と化す可能性がある。増加装甲付きのタイプもある。

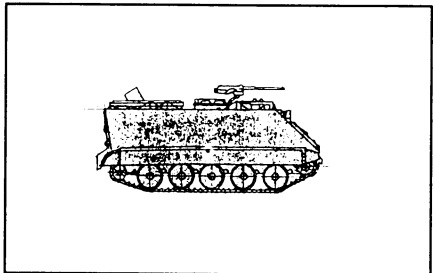
## ■ BMP-2

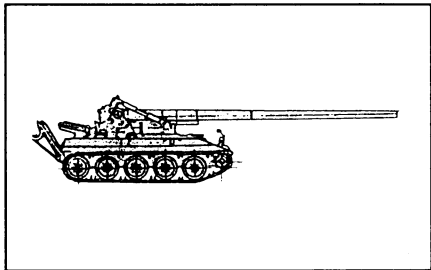
BMP－1の武装の強化、乗員の配置の変更などを図ったものが当車両であり、77年頃からBMP－1と交代、配備されつつある。大型の砲塔には2A42･30mm機関砲が装備され、これは攻撃ヘリにも十分対抗できる能力を持っている。砲塔部分に指揮官が位置するようになったので、指揮能力は向上した。またAT－5スパンドレル対戦車ミサイルも装備されている。アフガニスタン戦においても大量に使用された模様。増加装甲を付けたタイプ（BMP－2E）も存在する。

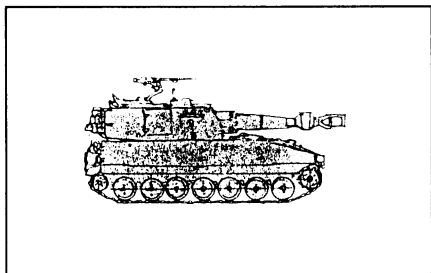
## ■ M106

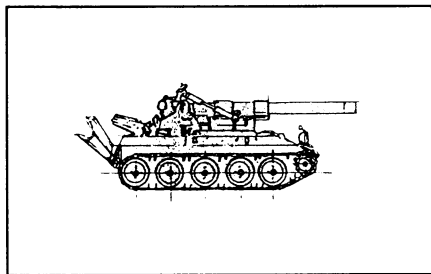
アメリカ陸軍の代表的兵員輸送車M113の派生型車両の一つ。火力支援用の車両として、車体後部の兵員室にM30－107mm迫撃砲を搭載している。迫撃砲そのものはターンテーブルに搭載されて、上部の円形ハッチを開放しての射撃、また車外に出して射撃することも可能である。副装備として機銃も搭載している。将来的に107mm迫撃砲は、より大型で攻撃力の高い130mm迫撃砲に換装される予定である。

## ■ FV432M

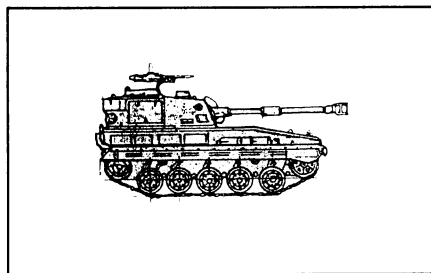
英国陸軍の兵員輸送車FV432の迫撃砲搭載型。
搭載されるL16A1・81mm迫撃砲は、360度回転式のターンテーブルに固定され、射撃の時には上部円形ハッチを開放して行われる。最大160発までの弾薬を搭載可能である。

## ■ M113-M

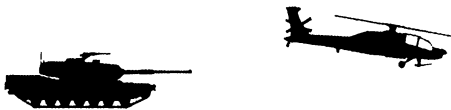
西ドイツに供給されたアメリカの兵員輸送車M113に、120mm迫撃砲を搭載した派生型車両である。M113は装甲はともかく、機動性や柔軟性についてはきわめて優秀な車両である。このために自走砲や迫撃砲搭載型など、敵弾を直接受けることのない戦場後方からの支援車両への改造が行われていることが多い。

## ■ MT-LBM

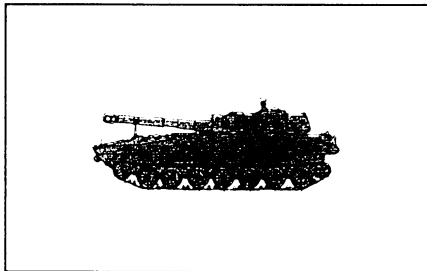
ソ連の民間用としても使用される中型のトラクターである「MT－L」に装甲を施したもの。本来迫撃砲や対戦車砲の牽引、弾薬補給のためなど、おもに後方支援用として使用されるが、兵員輸送車としても使われることもある。MT－LBMはゲーム・オリジナルの車両。車体後部の兵員室に380度旋回式のターレットを設け、120mm迫撃砲を登載したもの。東欧諸国では実際に同様の車両が使用されている。

## ■ M107

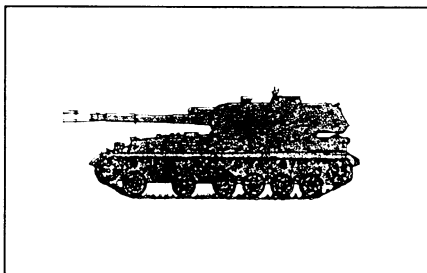
M53およびM55型自走砲に代わる、空輸可能な、長距離射程を持つ自走砲として56年より開発がはじめられたもの。61年から配備が開始となった。現在までに1000両程度が生産され、アメリカ陸軍はもちろんのこと、ドイツやイスラエル、韓国などでも使用されている。車体に直接搭載されたM113・175mm加農砲は、最大射程32.7kmを誇り、毎分1発の割合で発射することができる。車体に搭載できる弾薬はわずか2発であり、残りの弾薬はM548弾薬運搬車によって運ばれる。

## ■ M109

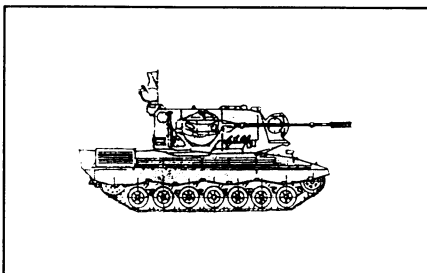
開発が始まってから40年が経過しようとしているものの、いまだに20カ国以上もの国で使用されている、優秀な自走砲である。生産台数は10000台にも及ぶ。全周旋回式の砲塔に搭載されているM126・155mm榴弾砲は、14.6kmもの射程がある。弾薬携帯数は28発である。射程を18.1kmに延長したA1型、エンジン系の改修などを行ったA2型、砲塔の大型化と装填装置の改善などを行ったA6型、その他使用国によって数多くの派生型が存在する。

## ■ M110

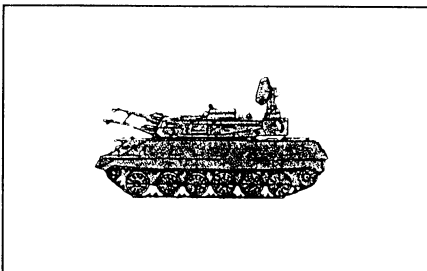
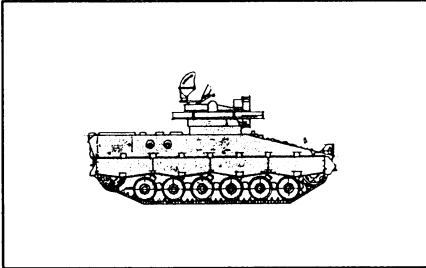
M107と同時期に開発された自走榴弾砲。弾薬携帯数が2発しかないので、普段はM548弾薬車と行動を共にする。現在M107の大部分がM110シリーズへの改修を受けつつある。搭載されているM2A2・203mm榴弾砲の射程は16.8kmである。なお長距離射程化と新型弾薬の使用を狙ったA1型、砲身にダブルバッフル型のマズルブレーキを追加、弾薬形式の使用範囲を広げ、射程を延長、さらに核砲弾や中性子砲弾の発射も可能としたA2型も存在している。

## ■ ABBOT “アボット”

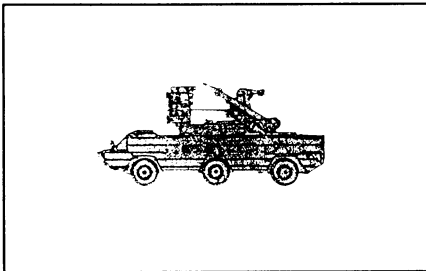
兵員輸送車ファミリーであるFV432の車体に、L31A1・105mm砲を搭載した英国陸軍の自走砲。60年代に開発された。砲塔は車体後部にあり、完全密閉式の構造となっている。弾薬40発を携帯でき、1分間に最大12発の発射が可能である。搭載されている砲の最大射程は1.7kmとなっている。対戦車用の直接照準器も備えているので、後方支援のみならず直接攻撃にも使用できる。インドなどにも輸出されている。

## ■ SO-122

MT－LB装甲兵員輸送車の車体にD－30・122mm野砲を搭載したソ連の自走砲。浮航性能も兼ね備え4.5km／hまでの速度が出せる。砲塔はかなり小型で、低くできている。自動装填装置も装備されているらしいが、性能はそれほど高くはない。車体全体としてもコンパクトなものであり、これは当時の主力輸送機An－12のサイズにあわせたものだと推測される。搭載砲の最大射程は通常の榴弾で15kmあまり、RAP（ロケット補助推進弾）で21.9kmとなっている。

## ■ SO-152

SO－122とほぼ同時期に開発、配備された自走砲。自動車化狙撃師団や戦車師団の砲兵連隊、方面軍直轄の独立砲兵旅団などに装備されている。本体にはSA－4ガネフ対空ミサイルの自走車体を流用している。砲塔には主砲であるD－.20・152mm榴弾砲D－20の他に機銃なども装備されている。自動装填装置が採用されているものの、性能は低く、最大でも発射速度は1分あたり4発程度。最大射程は通常の榴弾で17km程度となっている。

## ■ GEPARD “ゲパルト”

主力戦車に随伴して機甲部隊の防空を行うために設計された対空自走砲。車体には旧式となった主力戦車レオパルド1のものが使用されている。大型砲塔の両側に、エリコン製KDA35mm機関砲を2門搭載。きわめて高い性能を持ち、有効射程は3500m、地上物に対する攻撃にも有効なものとなっている。砲塔後部に専用の対空捜索レーダーを装備し、射撃・移動中にも敵を探索することができるようになっている。ドイツの他に、オランダやベルギーなどでも使用されている。

## ■ ZSU23／4 “シルカ”

世界初の、レーダー制御射撃方式を採用したソ連の自走対空砲。機甲部隊随伴用の対空車両として、ZSU－57－2の後継機種となるべく登場した。83年までに6500両が生産されている。車体部分はASU－85空挺戦車の物を流用、またB－76射撃レーダーも搭載している。搭載しているAZP－23・23mm4連機関砲は有効射程が2.5km程度と比較的短く、優秀な対戦車ミサイルを搭載している攻撃ヘリには射程外から攻撃される可能性が高い。第4次中東戦争で大量に西側に捕獲された。

■ ROLAND "ローランド"

フランス・西ドイツが共同で開発を進めた、低高度防空用対空ミサイルシステム。マルダー歩兵戦闘車の車体に搭載して運用されている。ボフォース40mm対空機関砲の代替として採用された。車体には15〜18kmの索敵範囲を持つ捜索レーダーを搭載している。アメリカ陸軍にも採用されたが、様々な問題からわずか27両の配備で終了している。ミサイルそのものの性能は、攻撃距離が500〜6300mとなっている。現在では1型の他に、2・4・5型などの改修型が存在している。

■ SA-8 "ゲッコー"

75年から実戦配備されたソ連の低高度防空用ミサイルシステム。方面軍直轄の独立防空連隊や、師団の防空連隊に装備されている。車両にはミサイルランチャーの他に、捜索レーダーや誘導レーダーなど1セットすべてが搭載されているので、単独での行動が可能である。水上浮航能力も与えられている。最大射程、最大射高共に約13000mとされている。全長9mにも達する大きな車体と、6輪の車輪が特徴である。

■ M163

M113兵員輸送車の派生型車両で、同車体に航空機用のM61A1•20mm6連バルカン砲を搭載している。M42の後継として部隊配備された。米陸軍ではM48チャパラル対空ミサイルシステムとの混成大隊に、24両配置されている。搭載しているバルカン砲は対空射撃はもちろんのこと、地上目標に対しても有効である。対空射撃性能としては有効射程は1600m程度、対地射撃能力としては3000m程度となっている。アメリカ陸軍の他に、イスラエルやヨルダン、サウジアラビアなどでも使用されている。

■ M48 "チャパラル"

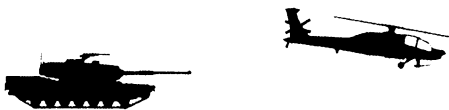
M163などの、対空機関砲タイプの対空車両の攻撃が及ばない距離の防空を担うミサイルシステム。米空軍のサイドワインダー空対空赤外線誘導ミサイルを自走化したものである。車体はM548のものを流用し、ミサイルそのものは1分間に4発まで発射可能。有効射程は6000m、有効高度は50〜3000mである。現在では悪天候時や夜間における攻撃能力を向上、赤外線に対するジャミングを抑えるシステムをも搭載したM48A2が配備されつつある。

■ 2S6SPAAG

ZSU－23－4に代わるソ連の最新型自走対空砲、88年にその姿が明らかとなった。3000mほどの射程を持つ30mm対空機関砲を2門（ハインドFの搭載機銃と同じ)、SA－19と呼ばれている対空ミサイルを4機、装備している。また追尾レーダーや捜索レーダーも搭載している。浮航性はないらしい。かなりの高性能であることが予測されるが、なにぶんにも情報不足のため詳しいことは不明。

■ SA-13 "ゴーフル"

SA－9の代替車両として77年から配備されている、低高度防空ミサイルシステム。連隊配下の防空中隊に配備されている。SA－9よりも射程エリアや赤外線シーカーなどの性能がアップしている。普段はドックファイアー捜索レーダー車と共に運用されているが、独自にレーダー警戒装置を備える車両もある。車体にはMT－LB装甲車のものを使用している。ミサイルそのものの最大射程は8km。最大射高は9.7kmとなっている。SA－8と比較して赤外線シーカーの能力が向上している。

## ■ LAW

ハンティング・エンジニア社開発の使い捨て軽量歩兵用対戦車兵器。携帯に便利なように、運搬時には発射筒を1m程度に縮めておくことができる。また、重量も2.1kgと携帯用対戦車兵器としては軽い方であり、肩つり用のスリングまでついている。間違った方法では絶対発射されないので、素人でも安心して撃てる。最大射程は500m。均質装甲で60mmまでの装甲を破壊できる。

## ■ RIFLE (NATO)

ライフル、という記述はされているが、当然の事ながら現代の歩兵の装備している銃のすべてが自動小銃（アメリカならM16、ドイツならG3）である。分隊や小隊単位での携帯式の対戦車火器なども配備されているので、攻撃力も第二次大戦当時とは比較にならないほど向上している。
ちなみに最もよく目にするライフルM16A1はベトナム戦争から採用された銃。有効射程は200mである。

## ■ LAW80

イギリス陸軍の使い捨て型対戦車ロケット。イギリス製品らしい無骨な外見と高い信頼性が特徴である。比較的大口径、大型の最新携帯式対戦車ロケットであり、ソ連陸軍の主力戦車T－72などに対しても有効な兵器となっている。
全長1.5m、重量は9kg。

## ■ RPG-7

第二次大戦でドイツ軍が使用したパンツァーファウストのデッドコピーであるRPG－2の発展型携帯用対戦車火器で、大量に生産され、東側諸国に広く普及している。使い捨て兵器のような外見をしているが、再使用ができる。すべての自動車化狙撃分隊と空挺分隊が装備している。単純な構造で、夜間や森林地帯でも使用できるため、その有効性は世界に認められた物となっている。ただし複合装甲などへの有効性は疑わしい。最近、改良型のRPG16が確認されている。

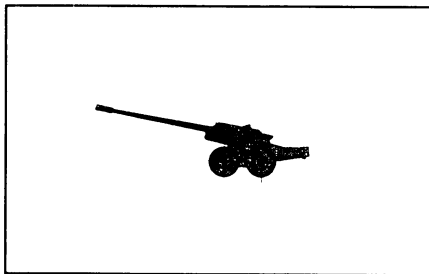
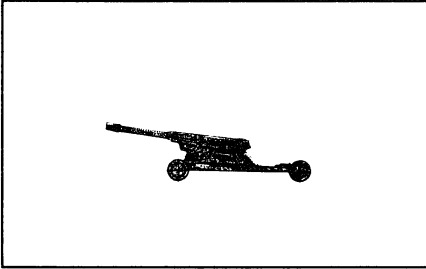
## ■ PZF3 “パンツァーファウスト3”

第二次大戦中にそのコンセプトが完成された携帯用対戦車兵器パンツァーファウストの後継ともいえる兵器である。
デイビスの平衡砲弾の原理（砲弾と同質量の物体を後方に同時に発射することで反動を抑える）を応用することによって、ほとんど反動無しに弾頭を発射できるため、狭い空間からの発射も可能となっている。市街戦などに大変有利といえる。有効射程は300～500m、専用の目標マーカーとゴーグルなどの暗視装置を使えば夜間での使用もできる。

## ■ RIFLE (SOVIET)

ソ連の小銃で最も有名なもの、といったらAKシリーズであろう。世界各国で使われており、一度は見た事があるはずだ。コピーやライセンス生産までも含めると、実に1000万挺近くも生産された。この突撃銃AKシリーズのベースが、実は第二次大戦中のドイツ軍が使用していた「Stg44」であるということは、知る人のみぞ知る事実である。現在使用されている「AK－74」はアフガニスタン侵攻の際、初めて確認された。AK－74を短縮化した「AKR」は空挺部隊などに装備されている。

## ■ 130GUN

長射程できわめて性能の高い対砲兵戦用火器。M－1936海軍砲として開発され、後にA－19に更新された。赤外線暗視装置などの直接照準射撃用の照準機を備え、トラックなどで牽引される。対戦車兵器としても優秀であり、実験用の突撃砲戦車SU－130にも使用されている。砲兵師団や独立砲兵旅団などに配備されている。イスラエルでは同砲を基本にした130mm対戦車砲を開発したとの話もある。

■ 180GUN

ソ連の代表的な、また世界最大の牽引砲。海軍砲を元に開発された物である。現在では0.2キロトンの核弾頭も発射できるようになっている。砲兵師団の重砲兵連隊や方面軍の砲兵旅団に配備されている。73年の中東戦争ではエジプト軍がイスラエル軍に対して使用した。最大射程は30km程度である。最大射程は、近年開発されたロケット補助推進式の榴弾を使用すると43.8kmにもおよぶ。

■ RAPIER "レイピア"

イギリスの地対空ミサイルで、71年から実戦配備された。固形燃料を用い、2段式推進方式によってマッハ2以上もの速度を出し、半自動誘導方式で目標に向かう。最終誘導は敵機の排気熱への追尾である。有効射程は250m〜6850m、超低空から3000m以上もの有効射高を持つ。同ミサイルの後継として、レイピア2000の開発も進められている。

■ SA-7

名称はグレイル。ソ連製の携帯用地対空ミサイル。誘導形態は赤外線ホーミング形式である。ミサイルそのものの飛行速度が遅いため、対戦闘機用としては不十分な威力しか持たないので、おもに対ヘリ兵器として、しかも大量に投入した時に最も威力を発揮する。シーカーにフィルターをつけた改良型なども存在する。73年の中東戦争では5000発近くも使用されたが、撃墜率は1ケタであった。

■ STINGER "スティンガー"

アメリカ製の携帯用地対空ミサイル。赤外線探知器により敵機にまで誘導される、いわゆる「打ち放し」ミサイル。センサーの性能が向上したために、全方向からの発射が可能となっている。全長1.5m、直径7cm、重量15kg。有効射程は5km。アフガニスタンのゲリラもこれを利用し、ソ連のヘリコプターが多数撃墜された。

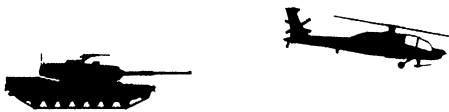
■ DRAGON

アメリカ陸軍や海兵隊で使用されている携帯式歩兵用対戦車ミサイル。TOW対戦車ミサイルを補助する目的で設計された。ミサイルそのものの飛行速度が遅く、操作も難しいので、評判はあまりよくない。有線誘導で、1000mを約10秒で飛翔する。命中すれば600mmの通常装甲を打ち抜くことが可能である。有効射程は1000m。

■ BLOWPIPE "ブロウパイプ"

イギリス軍が使用している短距離射程の個人携帯用地対空ミサイル。光学式の追尾装置を持ち、無線信号で目標まで誘導される。発射器は全長1.4m、最大射程は約3km。スティンガーにお株を取られている為、知名度は低い。イギリス軍の防空中隊などで使用されている。

■ TOW3

アメリカをはじめ世界各国で使用されている、大変融通が効く対戦車ミサイル。TOWとは発射筒使用・光学追尾・有線誘導の略である。ベトナム戦争や中東戦争など、数多くの実戦を経験している。ミサイル発射後、射手は照準内のスコープに目標をあわせておくだけでいいので、使用も簡便なものである。歩兵運搬用としてはもちろんのこと、車両やヘリコプターにも搭載されている。有効射程距離3.75km。

## ■ HELLFIRE “ヘルファイアー”

アパッチなどのアメリカ軍の対戦車ヘリ搭載用に開発されたレーザー誘導型の対戦車ミサイル。対戦車ミサイルには珍しく、超音速で目標まで飛来する。射程も他の対戦車ミサイルよりも50％ほど長い。発射した機体と別の所から目標に対してレーザーを射出し命中させる、間接攻撃も可能である。有効射程は6000m。

## ■ SAGGER “サガー”

有線誘導方式の旧式な対戦車ミサイル。発射速度が遅いため、有効性は低い。サガーが大量に使用された中東戦争で、イスラエルの戦車は飛来するミサイルを視認して回避行動を取れたという。しかし単純な構造ゆえ、高い信頼性を持つ。有効射程は3000m。携帯用の他に、BRDM－1などの軽車両に搭載されている姿もよくみかけられる。

## ■ MILAN “ミラン”

フランスと西ドイツによって共同開発された、小型軽量の半自動式対戦車ミサイルシステム。車両用などにも搭載されているが、比較的、射程距離が短いため、ヘリコプターなどには搭載されない。弾体の運搬や装填が簡便であり、高い運用性と高い命中精度の割には、安価であるため数多くの陸軍で使用されている。最近では車両搭載用の2連式の砲塔（MCT）が開発され、より多くの車両に搭載されるようになった。最大射程は2000m。

## ■ SPANDREL “スパンドレル”

形式ナンバー「AT－5」。大型の地上発射型対戦車ミサイル。その大きさゆえに兵士が携帯することはなく、装甲車などの車両に搭載するのが普通である。BRDM－2の上に5連装の形で搭載されることが多い。有効射程距離は4000m程度と推測される。また貫通力は500mm程度と、その大型の口径にしてはやや低めのようである。

## ■ HOT2 “ホット2”

ユーロ・ミサイル社で開発された、TOWと並ぶ西側の主力対戦車ミサイル。比較的、大型なので携帯での使用はできないが、数多くの車両やヘリコプターなどに搭載されてる。推進装置の性格上、短距離の目標より長距離の目標に対して有効な対戦車ミサイルとなっている。HOT2はHOT1より弾頭が大型化され、貫通力も増加している。通常装甲に垂直に命中した場合、130cmの貫通力がある。有効射程は4000m。

## ■ SPIRAL “スパイラル”

形式ナンバー「AT－6」。ハインドやホッカムなど、対戦車ヘリに搭載するための対戦車ミサイルで、地上発射能力は無い様子である。ヘルファイアー対戦車ミサイルと類似した性能を持つと言われるが、詳細は不明。光学的な誘導装置を装備し、5000m程度の射程を持つらしい。最新兵器であるため詳細な情報は入手が困難である。

## ■ SWINGFIRE “スウィングファイア”

大型のイギリス製対戦車ミサイルで、車両に搭載されるのが普通である。発射機から離れた場所からの誘導（発射位置から100m程度）が可能。熱線映像を使用しているために、悪天候下でも攻撃が可能となっている。最大射程は4000m。基本的に現存の戦車のすべての装甲を貫通できる。